

# 日本の漢字音「呉音・漢音・唐音」と「呉(くれ)・唐(から)」の文化象徴的意義に関する考察\*

趙大夏\*\*

本稿は、日本の漢字音を構成する三層(呉音、漢音、唐音)と、訓読みである呉(くれ)および唐(から)が持つ文化的・象徴的な意義を考察する。これら多層的な音の採用が、古代から中世にかけての中国文化受容のパターンと、日本独自の言語的アイデンティティ確立の過程をいかに反映しているかを分析する。音読みは、異なる中国の「規範」や「権威」を選択的に採用してきた歴史を映し出す、時間軸のコードとして機能する。具体的には、呉音(ごおん)は初期の仏教的伝統という精神的権威を、漢音(かんおん)は唐王朝時代に確立された公的な学問的規範や政治的正統性を、そして唐音(とうおん)は禅宗や貿易を通じて導入された実用的な文化的潮流を意味する。これら三層の併存は、日本が単一の正統性ではなく、多層的な知的ヒエラルキーを構築しようとした努力を示している。一方、厳密な音韻的規範から離れた訓読みの「くれ」と「から」は、日本人が抱く「異国」そのものに対する抽象的かつ空間的な認識を象徴する。「呉(くれ)」は、遠方の先進文化や技術の「起源的な入口」としての強力なメタファーとして機能し、「唐(から)」は、中国大陸全体を指す包括的な「対外世界」の概念へと象徴語化された。本稿では、呉音と南朝音・百済音の音韻比較を通じ、呉音が百済人を媒介とする単なる外来音韻ではなく、「起源を記号化する文化的コード」であったことを示す。これらの分析を踏まえ、日本語史における「呉音(くれおと)」の記号的機能を再構成することを目的とする。

キーワード：呉(くれ)、唐(から)、漢字音の多層性、文化認識コード、概念メタファー  
(구례, 가라, 한자음의 다층성, 문화인식 코드, 개념 메타포)

## 1.はじめに

日本語には、漢字の音読みに複数の系統が存在するという、漢字文化圏

\* 이 논문은 서울여자대학교 학술연구비의 지원에 의한 것임(2025-0300).

\*\* 서울여자대학교 인문대학 일어일문학과 교수, chodhm@swu.ac.kr

でも珍しい特徴がある。例えば、「行」という一文字をとっても、「ギョウ」(行事、修行)、<sup>ギョウジ シュウギョウ</sup>「コウ」(行動、旅行)、<sup>コウドウ リョコウ</sup>「アン」(行脚、行灯)など、その読み方は実に多様である。これらの読みは、それぞれが異なる時代の中国語の発音を起源とし、日本への伝来経路や時期の差異を反映していると考えられており、一般には呉音(ごおん)、漢音(かんおん)、そして唐音(とうおん)という三つの主要な系統に分類されてきた。この分類は、日本の漢字音の歴史を理解する上で長らく重要な枠組みとして機能している。

しかし、その分類基準を厳密に見ると、各系統の伝来時期の連続性や、広大な中国における方言の多様性、さらには伝来経路の複数性(直接伝来、韓国経由など)が複雑に絡み合い、明確な境界線で区切れるものではないという曖昧さが浮上する。例えば、呉音の多くが百済を経由して伝わった<sup>1)</sup>とされる一方で、全てが百済経由ではない可能性も指摘され<sup>2)</sup>、また当時の百済人の中国語運用能力がその伝達の正確性に影響を与えたのであろうという推測も生まれる。これらの点は、単に音の系統を分類するだけでなく、その背後にある歴史的・文化的背景を深く掘り下げる必要性を示唆している。

さらに興味深いのは、この漢字音の「音読み」の分類とは別に、日本には漢字の「訓読み」が存在し、特に「呉(くれ)」や「唐(から)」といった言葉が、音読みの分類名と密接な関係を持ちながらも、それぞれが独自の多義性を有している点である。

例えば、「呉服(くれはとり)」や「呉人(くれひと)」における「くれ」は、古代中国の江南地方やそこからの渡来文化を指し示す。しかし、日本の地名である「呉[市](くれ[し])」が、木材を意味する「樽(くれ)」や複数の峰を指す「九嶺(くれ)」といった日本の固有語に由来する可能性も指摘されるなど<sup>3)</sup>、「くれ」の語源は一筋縄ではいかない。

同様に「唐物(からもの)」や「唐紙(からかみ)」に見られる「から」も、単なる唐王朝だけでなく、広範な「外国」や「外国からもたらされた新

1) 満田新造(1964)「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就て」『中国音韻史論考』武蔵野書院、p.620.

2) 山田孝雄(1994)『国語の中に於ける漢語の研究』(訂正第五刷)宝文館、p.138.

3) 秋庭隆(1996)『日本地名大百科 ランド ジャポニカ』小学館、p.438.

しいもの」を意味してきた。これらの訓読みは、漢字が単なる音としてではなく、その意味内容と直結した日本語固有の言葉としてどのように取り入れられ、文化的に定着していったかを示している。

本稿が分析の核とする「くれ」と「から」は、単なる地理的な名称に留まらず、日本古代における外来文化の受容をめぐる二つの異なる観念的枠組みを象徴している。

具体的には、「くれ」という語は「時間軸上の起源」、すなわち先進技術や文化が日本に渡来した際の特定の「開始点」と「権威的始点」を観念的に定義する機能を持つ。これは、受容された文化に精緻さと権威を付与する目的で利用された。

これに対し、「から」という語は「空間軸上の普遍性」を示し、特定の地域に限定されない一般的な「地理的来歴」や「外部性」を象徴する機能を持つ。読者の理解を助けるため、この二語の機能的差異(起源と普遍性)を念頭に置いて本論の議論を展開する。

本稿は、まず「呉(くれ)」と「唐(から)」が持つ二重の認識軸を表によって提示した後、3章で「呉(くれ)」が象徴する時間軸上の起源の観念を、伎楽や呉服の事例、そして語源説の検討を通じて詳細に分析する。次に、4章では「唐(から)」が象徴する空間軸上の普遍性を、その語源の変遷や具体的な文化財の用例を通して論じる。最後に、二つの訓読みの対比的な機能が、いかに日本文化の受容構造を規定してきたかを総括し、研究の貢献度を提示する。

〈表1〉 訓読み「呉(くれ)」と「唐(から)」が象徴する二重の認識軸

訓読み語	漢字	象徴する認識軸	観念的な機能	具体的な用例
くれ	呉	時間軸上の起源	権威, 伝統, 根源の固定化	呉服, 呉音, 呉楽(伎楽)
から	唐	空間軸上の普遍性	柔軟性, 広大な 外部世界への接続	唐物, 唐絵, 唐津, 韓

## 2. 日本の漢字音分類の概要と曖昧性

日本語に漢字が導入されて以来、その読み方は歴史的変遷を経て、今日では主に呉音、漢音、そして唐音の三つの主要な系統に分類されている。これらの分類は、漢字が日本に伝来した時期や経路、さらには中国における漢字の源流地の発音の違いを反映していると考えられている。この複雑な多層性は、日本語の語彙の豊かさを形成する一方で、その成り立ちを理解する上での独特な課題を提示している。

まず、呉音は、漢字音が日本に伝来した最も早期に形成された音韻的時代層を形成している。およそ6世紀頃から、仏教の公伝を契機として日本に本格的に定着したとされる。その源流は、当時の中国の江南地方の発音、特に長江下流域の発音に由来すると考えられている。この時期の漢字音は、多くの場合、百済を経由して日本にもたらされた。例えば、「行」を「ギョウ」、「生」を「ショウ」、「色」を「シキ」、「論」を「ロン」と読むのは呉音の典型である。呉音には「ガ・ザ・ダ・バ」といった頭子音に濁音を含むものが多いという音韻の特徴が顕著に見られ、これは源流である古代江南地方の中国語に有声子音が豊富であったことを示唆する。仏教経典の読誦に用いられたため、今日でも「修行(シュギョウ)」、「因縁(インネン)」、「刹那(セツナ)」、「阿弥陀(アマタ)」といった仏教用語や、「荷物(ニモツ)」、「合格(ゴウカク)」といった日常語の多くにその読みが残されている。

次に、漢音は、呉音に続いて日本に定着した漢字音の系統である。主に7世紀後半から9世紀にかけて、遣隋使や遣唐使によって、当時の中国の国際的な都であった隋や唐の長安地方の漢字音が、直接的かつ体系的に日本に伝えられた。漢音は、当時の中国の「正統」で「最新」の発音として、日本の朝廷によって国家的にその学習が奨励され、学問や行政の分野で積極的に採用されました。漢音には「行(コウ)」、「生(セイ)」、「色(ショク)」、「大(タイ)」、「馬(バ)」のように、非鼻音化・無声音化の傾向があり、その音韻は呉音と比較してより規則的で整然としていとされる<sup>4)</sup>。現代日本語では、「平行(ヘイコウ)」、「液化(エキカ)」、「算数

4) 沖森卓也(2011)『日本の漢字1600年の歴史』ベレ出版、pp.78-81.

(サンスウ)」「訓令(クンレイ)」「裁決(サイケツ)」といった学術用語や行政用語、漢詩の読みに広く用いられ、日本の律令国家体制の確立期における文化的基盤を築いた。

そして、唐音は、日本の漢字音分類の中で最も近世に形成された音韻的時代層に位置する。主に鎌倉時代以降(13世紀以降)、禅宗の僧侶や、日宋・日元・日明貿易に携わった商人などを通じて、中国の宋、元、明時代の江南地方の漢字音が日本にもたらされた。この「唐」という名称は、必ずしも唐王朝の発音に限定されるものではなく、広義の「中国」や「中国からの新しい音」を意味する。唐音には「椅子(イス)」「饅頭(マンジュウ)」「普茶(フチャ)」のように、呉音や漢音とは異なる独自の音形が見られ、一部の日常語や、特に禅宗用語や貿易関連の語彙に用いられた。

しかしながら、これらの分類は厳密な意味では曖昧さを内包している。第一に、漢字音の伝来は連続的なプロセスであり、それぞれの系統が明確な時代区分で一斉に切り替わったわけではない。むしろ、異なる系統の漢字音が互いに重なり合い、時に混じり合いながら日本に伝わった。例えば、漢音が盛んに導入された時期においても、呉音は日常語や仏教用語として使われ続けた。第二に、広大な中国大陸には、古くから多様な方言が存在し、その発音も時代と共に常に変化していた。そのため、「江南地方の音」や「長安の音」といっても一様ではなく、日本に伝わった漢字音も、その複雑な多様性のある程度反映している。第三に、伝来経路も一様ではない。呉音の多くが百済を経由したとされるが、一部には中国から直接、あるいは他の韓半島諸国を経由して伝わった漢字音も含まれる可能性が指摘されている。この経路の多様性は、伝わった漢字音の音形にも微妙な差異をもたらしたと考えられる。

これについて、築島裕氏は、次のように述べている。

漢字の字音には漢音・呉音がある。例えば「正」の字の漢音はシャウ(「現代かなづかい」ではショウ)である。このことは高校の教科書などで触れられているものもあり、又、漢和辞典にもこの区別によって両音を載せており、広く常識となっていることであ

る。しかしながら、漢音・呉音というものの厳密な定義は何か、又その由来ほどのようであるかという点になると、未だ判明しないことが少なくない<sup>5)</sup>。

さらに重要な点として、特に「呉音」は、漢音が日本に導入された後、「新しい正統な音」との対比で「古い音」として後から命名されたレトロニム(retronym)であるという歴史的経緯が挙げられる<sup>6)</sup>。伝来当時の人々が自らの漢字音を「呉音」と認識していたわけではないという事実は、この分類が純粋な音韻学的な基準だけでなく、歴史的・文化的な意図や認識に基づいて形成された側面を持つことを示唆している。

〈表 2〉日本の主要な漢字音分類と特徴

分類名	主な伝来時期	源流地域 (中国)	主な伝来経路	代表的な 音韻的傾向	主な語彙分野
呉音	6世紀頃～	江南地方	百済経由が主	語頭に濁音が多い	日常語、 仏教用語
漢音	7世紀後半～9世紀(遣隋使・遣唐使)	長安(北方)	中国からの直接伝来が主	語頭に清音が多い	学術用語、 律令用語、 漢詩の読み
唐音	鎌倉時代以降	江南地方 (宋・元・明)	禅僧、 貿易商人経由	呉音・漢音とは異なる音形	禅宗用語、 貿易関連語彙、 一部の日常語

このように、呉音、漢音、唐音という分類は、厳密な音韻学的な基準だけで完璧に区分できるものではない。各系統の境界線は、時に曖昧であり、互いに影響し合った複雑な歴史的プロセスを反映している。しかし、これらの曖昧さにもかかわらず、この分類は日本の漢字音の歴史的変遷、日中(韓日)文化交流の様相、そして日本語が外来語をどのように受容し、自らの音韻体系に適応させてきたかを理解するための、極めて有効で実用的な枠組みとして、現在も広く用いられて

5) 築島裕(1977)『国語の歴史』UP選書, p.23.

6) 山田孝雄(1994) 前掲書, p.128.

いる。これは、単なる音の分類を超え、特定の時代や文化的機能の階層を示す指標として機能しているからである。

### 3. 「呉(くれ)」の語源的多元性と観念的象徴性

「呉(くれ)」という言葉は、単に漢字の音読みの分類である「呉音」の由来や、古代中国の特定の地名を指すに留まらない。それは、日本の古代文化形成における極めて重要な文化象徴としての意義を帯びており、日本が初めて体系的な外来文化と接触し、それを自らの文化体系に取り込んでいった複雑な過程を鮮やかに映し出している。

#### 3.1 「呉(くれ)」が持つメタファー(Metaphor)的意味

ジョージ・レイコフ(George Lakoff)とマーク・ジョンソン(Mark Johnson)の「概念メタファー理論」(Conceptual Metaphor)によると、「メタファーの本質は、ある事柄を別の事柄によって理解し、体験することである。」(The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another.)<sup>7)</sup>と述べている。これは〈表 3〉のように、私たちが抽象的な概念(例：時間、権威、議論)を理解する際に、具体的な経験(例：金銭、空間、戦争)を借りて考えるというものである。

〈表 3〉 概念メタファー(Conceptual Metaphor)の例

概念メタファーの例	抽象概念(Target Domain)	具体概念(Source Domain)
議論は戦争である	議論	戦争
時間は金銭である	時間	金銭
空間は権威である	空間	権威(地位)

7) George Lakoff・Mark Johnson(1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago press, p.5.

本稿は「くれ」が日本の文化受容という抽象的なプロセスを、「古代の最も遠い起源」という具体的なイメージで構造化する認知的なコード(概念メタファー)として機能していた、ということを論じる。ジョージ・レイコフの理論に併せてまとめると、次のようである。

- ・ **具体的な起源(史実)からの分離:**「呉(くれ)」は、歴史的事実として韓半島を経由した技術(呉服、伎楽)の具体的な伝来経路とは切り離された。
- ・ **抽象概念への昇華:**「くれ」は、「遙か古代に存在した、最高の文明」という、抽象的な「権威」と「起源」の概念を、一つの具体的な音(くれ)と漢字(呉)にマッピング(写像)して理解するための道具として機能した。

「呉」のメタファーは、「呉服」「呉楽」に加え、「呉竹」「呉器」といった特定の技術的専門性を持つ事物に付与されることで、その洗練された技術が最初に流入した「起源的入口」を示す強力な文化的コードとして機能したと解釈される。これは、特に初期の対外交流において、遙か遠方から海を越えてもたらされた外来文化の技術的優位性を認識し、それに権威を付与するための言語装置であった。

一方、「唐(から)」は「唐物」「唐衣」あるいは『韓鍛(からかぬち)』に見られるように、時代が下るにつれて中国大陸全体や広く対外世界を指す抽象的な地理的総称へと象徴語化された。このことから、「呉」が特定の技術的起源に焦点を当てたコードであったのに対し、「唐」はより広範な対外世界の空間的総称としての役割を担い、両者のメタファーとしての機能は厳密に区別されると論証する。

### 3.1.1 呉服(くれはとり)と技術の定着

「呉服(くれはとり)」という語は、織物技術の先進性を象徴する代表的な事例である。応神天皇紀の『日本書紀』の記述によれば、織女である呉織(くれはとり)と漢織(あやはとり)が来日したとされるが、記録には使節が「高麗国を渡り」、すなわち韓半島を経由したことが明確に記されている<sup>8)</sup>。

〈表 4〉「呉服(くれはとり)」の文化的含意

史料の記述	文化的含意
史料の根拠	『日本書紀』応神天皇紀三十七年二月条に、阿知使主らが「高麗国を渡り」呉織・漢織を連れ帰ったと記述。
文化的含意	伝来の経路は韓半島であるにもかかわらず、技術の起源を象徴する語として「呉」が選ばれた。これは、中継地(高麗・百濟)よりも、根源的な文化の権威(呉)を重視する日本の認識構造を示している。

このことから、「呉」は伝来の事実(経路)よりも、その技術が持つ最高の権威を象徴するために用いられた「起源のアイコン」であったことが明らかになる。

### 3.2 伎楽(呉楽)の呼称が示す歴史的事実と文化的記憶の乖離

「呉(くれ)」が特定の時代や地域を超越した象徴であったことは、仏教芸能である伎楽(ぎがく)の呼称との呉との観念的な結びつきにも見られる。『教訓抄』<sup>9)</sup>などの文献は、この議論の核心となる。

- ・ **歴史的事実**：伎楽(ぎがく)は、612年に百濟の味摩之(みまし)によって日本に伝えられたとされる。その起源は、さらに西域や中国の南北朝時代に遡る。
- ・ **呼称の観念**：伎楽は百濟経由にもかかわらず、呉との観念的な結びつきが見られる。『教訓抄』などの文献は、この芸能が「初期仏教と同時に日本にもたらされた、神聖で伝統ある異国の芸術」であるという、日本人の中での文化的記憶が優先され、呉の遺風と強く関連付けられていたことを示唆する。

8) 日本書紀、応神天皇三十七年(丙寅)条に、「春二月戊午朔、遣阿知使主・都加使主於呉、令求縫工女。爰阿知使主等渡高麗国、欲達于呉。則至高麗、更不知道路。乞知道者於高麗。高麗王乃副久礼波・久礼志二人為導者。由是得通呉。呉王於是与工女兄媛・弟媛・呉織・穴織四婦女。」とある。  
坂本太郎外3人(1994)『日本書紀(二)』岩波文庫黄4-2、p.516.

9) 狛近真(1233)『教訓抄』巻4、九州大学文学部、マイクロ収集、国文/28E/3、p.119.

伝来の「事実」と文化の「記憶・観念」との間に明確な乖離が存在し、「くれ」が伝統と権威を固定化するための概念装置として機能したことを決定的に示している。

### 3.3 「呉(くれ)」語源的多層性の検証 : 伝来経路説の具体的な検討

「くれ」の語源については、特定の地名に求める説が複数存在する。これらは「くれ」が単一の起源を持たず、伝来ルート上の複数の重要拠点の音韻的連想から形成された可能性を示唆している。

#### 3.3.1 句麗(高句麗)説、帯方郡説(漢文化の最前線としての「くれ」)

「くれ」の音韻的起源を、高句麗の別称である「句麗(クリ)」<sup>10)</sup>や、漢民族の行政機関であった「帯方郡」周辺の地名に求める説は、「くれ」が特定の国名ではなく、韓半島にある「中国文明の最前線」を指し示した可能性を提示する。

- ・ **黄海道鳳山郡説**：伎楽伝来者の味摩之が習得した地とされる帯方郡周辺の地域、特に仮面舞踊の発祥地である黄海道鳳山郡の古い地名が「くれ」に音韻的に近かった可能性を指摘する<sup>11)</sup>。
- ・ **観念的統合**：これらの説が示すのは、「くれ」が中国大陸江南の文化(呉国)と、韓半島の中継地(帯方郡、高句麗)の両方から来る先進文化を、一つの言葉で統合する装置であったということである。つまり、「くれ」は「日本への入口における中国文化の総体」を指した。

10) 鮎貝房之進(1937)『日本書紀朝鮮地名考』国書刊行会、p.195.

11) 서연호(2011)「미마지 기악의 일본 전파에 관한 재론 - くれ(呉)의 故地를 中心으로-」『Journal of Korean Culture 17』한국어문학회 학술포럼, pp.30-31.

### 3.3.2 南原(古竜)、久礼(加羅)説：中継地のローカルな地名と音韻的連想

さらに「くれ」の語源は、百済領内の重要な文化拠点や、加羅(伽耶)の小国にも求められている。

- ・ **南原(古竜)説**：伎楽を伝えた百済の勢力圏内にあり、古地名が「古竜(くり)」などに音が近かった南原に起源を求める説。この地域は一時的に帯方とも称され、行政的権威とも結びついていた<sup>12)</sup>。
- ・ **久礼(加羅小国)説**：洛東江中下流域の加羅の小国「久礼(くれ)」に起源を求める説<sup>13)</sup>。

これらのローカルな地名説は、「くれ」という音が、韓半島の複数の異なる交流窓口に存在し、日本側がそれらを共通の音(くれ)を持つ文化発信地として認識し、後に「呉」という漢字を当てた可能性を示唆する。

### 3.4 「くれ」の象徴性-単一地名から「起源のアイコン」への昇華

以上の分析から、訓読み「呉(くれ)」の最終的な意義は、「特定の単一の地名」にあるのではなく、「初期の先進文化すべてを包摂し、その権威を固定化する文化的アイコン」としての機能にあったことが結論付けられる。

この「起源」とは、歴史的事実としての真の伝来経路を示すものではなく、日本文化が外来の先進技術に対し、その権威を付与する目的で、観念的に「洗練の始まりの地点」として定義した機能的なアイコンであると解釈される。

この言葉は、時間的距離や伝来経路の混乱を整理し、日本の文化史における揺るぎない「始まり」の地点を観念的に定義する役割を果たしたのである。

12) 李丙燾(1964)「地理 歴史上으로 본 湖南」『湖南学』巻2, 全南大学校, p.20.

13) 村上祥子(1991)「韓国仮面劇と日本伎楽の比較研究」『比較民俗研究』3, 比較民俗研究会, p.97.

#### 4. 訓読み「唐(から)」の空間的・普遍的象徴性

「唐(から)」という言葉は、日本の文化史において「呉(くれ)」と同様に、そして時にそれ以上に広範な意味合いを持つ重要な文化象徴として位置づけられる。「呉(くれ)」が古代初期の限定的な交流の中で、特定の先進技術の「専門性のアイコン」として機能が固定化されたのに対し、「唐(から)」は恒常化した交流に伴う文物の多様化の結果、異国の広大さと絶え間ない文化交流という、より空間的・時間的な拡張性を伴う抽象的なメタファーを象徴するに至ったことを示している。

「から」という語が持つ最も顕著な特徴は、それが単に特定の王朝名(唐)を指すだけでなく、古くから日本にとっての「外国」、特に中国大陸や韓半島全般を指す総称として用いられてきた点にある。この包括的な意味合いは、様々な複合語に見て取れる。

##### 4.1 「から」の語源と「広大な異国」の観念

訓読み「唐(から)」は、「呉(くれ)」が象徴する時間的な起源とは対照的に、空間的な広がりや普遍性を象徴する。

- ・ 語源の変遷：「から」の語源は、元来、韓半島の「韓」や「加羅」、あるいは単に「遠い異国」を意味する語であったとされる。しかし、中国における唐王朝(618年-907年)の繁栄と国際的な影響力の拡大に伴い、漢字の「唐」が当てられることで、「から」の概念は韓半島を超え、中国大陸全体、さらには外部世界全体を指し示す包括的な語へと拡張した。
- ・ 空間的普遍性：「から」は、唐の滅亡後も(五代十国、宋、元、明の時代を通じて)用いられ続け、「中国文明そのもの」という普遍的な空間的概念を体現した。これは、「呉(くれ)」が特定の技術や伝統を象徴するのに対し、「唐(から)」は異国の広大さと絶え間ない交流を象徴したことを示している。

## 4.2 「から」の多様な連想(「韓」「空」などに見る空間的広がり)

訓読み「から」は、漢字「唐」以外にも「韓」(韓国)や「空」(空間、虚無)など、複数の漢字に当てられてきた歴史的経緯を持つ。この多義性は、「から」が持つ空間的な拡張性を強く裏付けている<sup>14)</sup>。

- ・「韓」の連想：古代において韓半島との交流が盛んであった時代には、「韓」の字が当てられ、特に地理的な近さや交流の頻繁さを伴う「異国」を指した。これは「から」の地理的起源を示す。
- ・「空」の連想：「から」は、「空っぽ」や「虚(むな)しい」といった「空間の広がり」や「中身がない状態」を意味する「空(から)」とも音韻的に結びつく。この連想は、「唐(から)」が単なる国境を越えた「広漠とした外部世界」という、極めて抽象的な空間概念を包含していたことを示唆する。

## 4.3 文化財・技術における「から」の用例と実利的な機能

「唐(から)」の語は、その普遍性ゆえに、広範な文化財や技術のカテゴリを示すために用いられた。これは、交流の頻繁化により、大陸起源の新しい機能や様式を伴う文物全般を指し示す分類ラベルの役割を担ったことを意味する。例えば、「唐物」は流通量増大の代名詞となり、「唐絵」は大陸の画風という新しい様式を、「唐津」は大陸の製陶技術を導入した様式を指し、これらはいずれも日本在来の文化にはない「新しい様式(唐様)」という機能的な価値を伴っていた。したがって、「唐」は単に物品が輸入されたという事実の結果ではなく、新しい文化様式に対する分類機能という、より積極的な役割を担ったと結論づけられる。

14) 新村出編(1994)『広辞苑』第四版、岩波書店、p.541.

〈表 5〉文化財・技術における「から」の機能

用例	意味合い	機能	歴史的背景
唐物 (からもの)	中国製品全般、特に 美術品や高級貿易品	実利的・経済的な価 値の指標	宋・元・明時代におけ る禪宗文化や対外貿易 の隆盛を背景とする
唐絵 (からえ)	中国風の絵画、 特に北宋以降の漢画	普遍的な芸術様式の 指標	日本画(大和絵)と対比 され、大陸の普遍的 な画風を指し続けた
唐津 (からつ)	肥前唐津の陶器。唐か らの技術導入や貿易 港であったことに由来	地理的な交易窓口の 指標	韓半島や中国大陸と の直接的な交流拠点と しての機能を反映する

これらの用例から、「唐(から)」は、時代や物品の出所が多様であつても、それが「大陸文化の普遍的な影響下にあるもの」であることを示すタグとして機能し、日本の広範な文化受容を柔軟に支えたと言える。

〈表 6〉訓読み「呉(くれ)」と「唐(から)」の機能と象徴性の対比

観点	呉(くれ)	唐(から)
認識軸	時間軸上の起源	空間軸上の普遍性
象徴するもの	伝統、権威、始まり(First Contact)	広大さ、外部世界、継続的交流 (Continuous Trade)
文化的機能	権威の固定化(静的)：特定の技 術や儀式に揺るぎない正統性 を付与する。	交流の柔軟化(動的)：時代や出 所に関わらず外部世界との接 続を可能にする。
主な用例	呉服(技術)、呉楽(儀式)、呉音( 伝統音)	唐物(物品)、唐絵(様式)、唐津( 貿易窓口)

このように、「唐(から)」は、その多義性と時代ごとの適応性を通じて、日本が古代から中世にかけて、いかに広範かつ多様な外来文化を受け入れ、それを自らの文化へと昇華させてきたかを物語る、力強く、そして常に変化し続ける文化象徴語なのである。その存在は、日本が特定の時期だけでなく、継続的に国際社会と交流し、外来文化を取り込むことで自らを刷新してきた歴史を雄弁に示している。

## 5. 「呉音・漢音・唐音」と「くれ・から」が示す文化受容史

日本の言語に深く根ざした呉音、漢音、唐音という漢字音の分類体系、そして「呉(くれ)」や「唐(から)」といった訓読みの語彙は、それぞれが独立した言語現象であるに留まらず、日本列島が経験した数世紀にわたる大陸文化受容の壮大な歴史を象徴する、重要な指標として機能している。これらの言葉を包括的に考察することで、日本がいかにして外来文化と出会い、それを吸収し、最終的に独自の文化へと再構築していったかという、多層的でダイナミックな文化変容のプロセスが鮮やかに浮かび上がってくる。

まず、「呉(くれ)」と呉音は、日本の文化受容史における黎明期と、その後の文化の根源的な形成を象徴している。およそ6世紀頃、仏教の公伝を契機として、中国の江南地方の文化や、それを仲介した韓半島、特に百済からの影響が日本に本格的に流入した。「呉服(くれはとり)」や「呉人(くれひと)」といった言葉が示すように、「くれ」は当時の日本人にとって、新しく、そして先進的な技術や知識、人々がもたらされる源泉としての「大陸」を具体的に捉える言葉であった。この時期に伝えられたのは、単なる物品ではなく、高度な織物技術、建築技術、さらには文字や宗教といった、当時の日本の社会に根本的な変革をもたらす体系的な文化であった。たとえば、『日本書紀』には、百済から渡来した王仁(わに)博士が漢字や儒教を伝えたとされる記述があり、彼らの存在が日本の文字文化の基礎を築いたことが示唆されます。この過程で導入された漢字音は、後に「呉音」と名付けられ、仏教経典の読誦を通じて広く普及し、日本語の音韻体系の中に深く根を下ろした。今日でも「修行(シュギョウ)」「因縁(インネン)」「刹那(セツナ)」といった仏教用語、あるいは「荷物(ニモツ)」「合格(ゴウカク)」といった日常語に呉音が多く残っている事実は、この初期の文化受容がいかにかに日本の言語と文化の基層を形成したかを物語っている。この段階は、日本の国家体制がまだ確立されていない中で、先駆者たちが異文化の断片を吸収し、新たな社会の萌芽が始まった時期と言えるであろう。

次に、漢音と、時に漢音をも指した「唐(から)」の言葉は、日本の文

化受容史における体系化と国家主導の時代を明確に示す。奈良時代から平安時代にかけて、日本は遣隋使や遣唐使を積極的に派遣し、中国の隋や唐の最盛期の文化を直接、大規模に吸収した。この時期の「唐(から)」は、単なる外国というよりも、「偉大な文明の中心」「世界の規範」としての中国を強く意識した言葉であり、日本の国家体制や学術体系が整備される上で不可欠な規範として機能した。伝えられた漢音は、当時の唐の首都・長安の「正統な」発音とされ、律令制度、儒教、唐詩、あるいは仏教における新たな宗派(例えば、密教)といった高度な知識や制度と共に、国家レベルで学習が奨励された。例えば、大学寮での漢学教育では漢音が用いられ、後の貴族文化や文学、歴史記述に大きな影響を与えた。漢音が「法律(ホウリツ)」「革命(カクメイ)」「文化(ブンカ)」といった学術的・政治的な語彙に多く用いられているのは、この時代の体系的な文化受容の証である。この段階は、日本が自国の体制を確立し、国際社会における地位を確立するために、外国の先進文化を意識的に選択し、計画的に導入していった時期と言える。

そして、唐音と、再び広義の「唐(から)」の言葉は、中世以降の文化の再受容と多様化の様相を映し出す。

鎌倉時代以降、禅宗の僧侶や日宋・日元・日明貿易に携わった商人などを通じ、宋、元、明といった唐以降の中国の新たな文化潮流と、それに伴う発音(唐音)が日本に伝わった。この時期の「から」は、中国からの多様な舶来品や禅の思想、水墨画、あるいは茶道といった新たな芸術様式を総称する言葉として使われ続け、日本の生活や美意識に深く影響を与えた。唐音は「椅子(イス)」「饅頭(マンジュウ)」など、より実生活に根ざした語彙や、禅宗の教えと共に伝わった用語に多く見られ、従来の呉音や漢音とは異なる、より新しい音韻的時代層を形成した。「唐音」が「唐声(からごえ)」とも呼ばれた事実は、その響きが当時の日本人にとって「中国から来た新しい発音」として直感的に認識され、単なる言語音を超えた文化的な意味合いを帯びていたことを示唆している。この段階は、国家主導の一方的な文化導入から、より民間レベルでの交流が活発になり、日本の社会や文化が多様な外来要素を柔軟に吸収し、独自の解釈を加えることで、さらに複雑で豊かな文化

を形成していった時期と言えるであろう。

このように、呉音・漢音・唐音という漢字音の分類は、それぞれが異なる時代の「音の地層」として、日本の言語的ルーツの重層性を示しています。同時に、「呉(くれ)」と「唐(から)」という訓読みは、それぞれの時代における外来文化の具体的な内容、伝来経路、そして日本人自身の異文化に対する認識の変化を象徴している。これらの言葉が織りなす関係性を見ることで、日本が単に外来文化を模倣しただけでなく、それを自らの言葉や文化体系の中に巧みに取り込み、独自の解釈を加え、時には変容させることで、現在の豊かな言語と文化を創造していった、複雑でダイナミックな文化受容史が鮮やかに浮かび上がってくるのである。漢字とその読みは、まさに日本が世界とどのように交流し、自らのアイデンティティを確立していったかを示す、生きた歴史的証拠と言えるであろう。

## 6. 結論

### 6.1 「呉(くれ)」と「唐(から)」が構成する二重の文化認識コード

本稿は、日本の漢字訓読み「呉(くれ)」と「唐(から)」が、外来文化の受容において、それぞれ「起源の観念」と「空間の普遍性」という対照的な二重の文化認識コードを確立していたことを実証した。

「呉(くれ)」の役割は、時間軸上の根源にあり、伝来の経路や年代の複雑性を無視し、日本にとって最も初期の、神聖で権威ある先進文化の「始まり」を観念的に固定する役割を担った。これは、文化的記憶と伝統を尊重する、内向的かつ静的な認識枠組みであったと言える。

対照的に、「唐(から)」の役割は、空間軸上の広がりを象徴することにあつた。特定の王朝の興亡に左右されることなく、広大なアジア大陸および外部世界との継続的かつ実利的な交流を可能にする、外向的かつ動的な認識枠組みを提供した。

この二語の共存と機能的分担は、日本が外来文化を導入する際、

「歴史的権威」と「実用的柔軟性」という二つの異なる要求を、言語を通じて見事に統合していたことを示している。

## 6.2 研究の学術的意義と今後の課題

本研究は、漢字の読み方に関する議論を、音読みの規範史から、訓読みの文化記号論的機能へと拡張する点で学術的意義を持つ。音読みが中国側から提供された「規範」であったのに対し、訓読みの「くれ」と「から」は、日本側が自らの文化的必要性に基づいて創造した「外来文化の分類法」であり、日本独自のアイデンティティ形成の巧みな戦略を反映している。

今後の課題としては、「くれ」と「から」以外の訓読み(例:「漢(あや)」)が持つ象徴性を分析し、日本の外来文化認識の全体像をさらに立体的に構築していく必要がある。また、これらの語彙が、中世以降の日本人の世界地図(空間認識)に具体的にどのような影響を与えたかを、絵画史や地理学の側面から検証することが求められる。

## 参考文献

- 서연호(2011) 「미마지 기약의 일본 전파에 관한 재론 -くれ(呉)의 故地를 中心으로-」 『Journal of Korean Culture 17』 한국어문학국제학술포럼, pp.30-31.
- 李丙燾(1964) 「地理 歴史上으로 본 湖南」 『湖南学』 卷2, 全南大学校, p.20.
- 秋庭隆(1996) 『日本地名大百科 ランド ジャポニカ』 小学館, p.438.
- 鮎貝房之進(1937) 『日本書紀朝鮮地名考』 図書刊行会, p.195.
- 沖森卓也(2011) 『日本の漢字1600年の歴史』 ベレ出版, pp.78-81.
- 粕近真(1233) 『教訓抄』 卷4, 九州大学文学部、マイクロ収集、国文/28E/3, p.119.
- 坂本太郎外3人(1994) 『日本書紀(二)』 岩波文庫黄4-2, p.466, p.516.
- 新村出編(1994) 『広辞苑』 第四版、岩波書店、p.541.
- 築島裕(1977) 『国語の歴史』 UP選書、p.23.
- 満田新造(1964) 「朝鮮字音と日本呉音との類似点に就て」 『中国音韻史論考』 武蔵野書院、p.620.
- 村上祥子(1991) 「韓国仮面劇と日本伎楽の比較研究」 『比較民俗研究』 3、比較民俗研究会、p.97.
- 山田孝雄(1994) 『国語の中に於ける漢語の研究』 訂正版第五刷、宝文館、p.128, p.138.
- George Lakoff · Mark Johnson(1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago press, p.5.

〈Abstract〉

## The Cultural and Symbolic Significance of Sino-Japanese (Goon, Kanon, Toon) and Native Readings (Kure, Kara)

Cho, Dai-Ha

This paper examines the cultural and symbolic significance of the three Sino-Japanese reading strata (On'yomi: Goon, Kanon, Toon) and the native readings (Kun'yomi: Kure and Kara), analyzing how this system reflects Japan's centuries-long pattern of cultural reception and the establishment of its linguistic identity.

The On'yomi system reflects the selective adoption of Chinese norms to construct a multi-layered intellectual hierarchy: Goon (early Buddhist authority), Kanon (Tang scholarly standard), and Toon (later practical currents).

In contrast, the flexible Kun'yomi conveys the spatial perception of the "foreign land." Kure (呉) functions as a powerful metaphor for the authoritative origin and early advanced technology, while Kara (唐) signifies spatial universality for continuous exchange.

We conclude that the co-existence of rigid On'yomi and adaptive Kun'yomi reveals a highly sophisticated cultural strategy, allowing Japan to respect Chinese literary authority while integrating its distinct native worldview.

Key Words : Kure (呉), Kara (唐), Multilayered Structure of Sino-Japanese, Cultural Recognition Code, Conceptual Metaphor

투 고 일 : 2025년 10월 13일

심 사 일 : 2025년 10월 17일

게 재확정일 : 2025년 11월 03일